



平生の語り合い



二組の夫婦がいる。

双方共に六十歳に少し前のご主人が「癌」の宣告を受けているのだが、どちらの奥さんも それをご主人には明かしてはいない。

ひと組の方の奥さんは素晴らしいほどの念仏者なのだが、それほどの人でも「いつかは告げたい。告げなければならぬ」と、その心を痛めながらも、さてとなると、どうしても言葉にはならぬという。

あとひと組のご夫婦は、ご主人が癌の宣告を受けてからというもの、店を閉めてまで二人揃って聴聞の座についてくれるのだが、なにも知らぬご主人の側で、ひっそりと涙をぬぐっては聞いてくれる奥さんのお姿を見て、話す方の私もまた胸のつまる思いがする。

『温もりを生きる』雑賀正晃 著より



今回は「癌の宣告」がテーマではなく、「平生(へいぜい)にこそ、大事なことを語り合う」がテーマです。

病気のことを言い出せない理由は、人それぞれ異なる事情があるでしょう。しかし私たちの中に、「死について語ることなど“縁起でもない”」ととらえる心が、どこかにないでしょうか。

浄土真宗8代目の宗主・蓮如上人がよく使っておられた、「後生の一大事(ごしょうのいちだいじ)」ということばがあります。「死んだ先に“覚りの仏”の命をいただくのか、迷いの世界でさまよい続けるのか、これほど大事なことはない」という意味です。だからこそ、私たちを「間違いなく仏にする」と誓った阿弥陀さまの願いを聞いていくことが大切なのです。そしてそれを聞くことができるのは、「まだ死ぬとは思っていない時」・すなわち今・平生にしかありません。

ここで、一つの大事な問題点を考えておきたいと思う。それは、平生にこれらの事に関して**家族間の話し合いというものが全くなされていらないのではないか**ということに就いてなのである。

どうでもいいような些細なことで言い争うようなことがあっても、本気に話し合わなければならぬような事だけは、常に避けて通るといふなまぬるさが問題なのではないかと言いたくなるのである。「望まぬことではあるが…」というような話し合いは、事実そうなったとき、話し合った通りに必ずしもいくとはいえないまでも、そのような事について普段の語らいの中で大切に話し合っただけで本気に考えあう家庭でありたいものである。

現在真光寺住職は、民間の資格である「終活アドバイザー、終活カウンセラー」を取るための勉強を始めています。**ご家族での大切な話し合いの手助けができないか…。**それが「後生の一大事」にも耳を傾けていただく、一助になると考えるからです。

